

JET2020 開催まで 28 日



JET 理事

横井 宏佳(福岡山王病院 循環器センター)

JET-VEINUS 2020 見どころ紹介

今を逃すな、静脈インターベンション；静脈疾患を学び、適切な治療を
(日本の EVT に麒麟が来る)

15 年前、米国の VIVA に横井良明先生（岸和田徳洲会病院）、中村正人先生（東邦大学医療センター大橋病院）と参加し、下肢動脈、腎動脈、頸動脈をはじめ全身血管病のカテーテル治療の最前線に触れ、大きな刺激を受けました。この頃、日本においてはデバイスラグのために遅れていた薬剤溶出性ステント CYPHER が臨床使用可能となり、再狭窄は無くなり冠動脈疾患治療に CABG は不要となり、すべて PCI で治療可能になる時代が始まると PCI 領域は大変盛り上がっておりました。多くの循環器医はカテーテル治療の中心は PCI であり、動脈硬化性疾患の少ない我が国において下肢閉塞性動脈硬化症、腎動脈狭窄症、頸動脈狭窄症の発生頻度は少なく、EVT は日本では広がらないと予測していました。

しかし、我々は自分達の感じたもの、心を信じて、承認されたデバイスがほとんどない中で、心ある企業の協力の基に、JET を立ち上げました。その後の、我が国における EVT の発展は皆さんもご存じのとおりです。各種疾患を学ぶことにより、我々の日常診療において多くの全身血管病のために困っている患者さんがたくさんいることに気づきました。今や、循環器医が下肢動脈を始め、全身血管病治療にあたることは標準的となり、全国に普及しています。また、この初期の頃に、我々とともにチャレンジしてくれた若者たちが、今や世界をリードする立場に成長したことは、JET 設立メンバーとしては嬉しい限りです。

しかし、未だ我々が目指した全身血管病の治療のゴールは達成できていないように思います。米国には 30 年前より血管専門医(Vascular Medicine)が存在し血管病の最

適な診断、治療、予防を追求しています。彼らは全身の動脈疾患のみならず静脈疾患にも深く関わっています。このような専門医が存在するため、本邦よりも静脈疾患に対する理解、啓蒙が進んでおり、表在のみならず、深部静脈のインターベンションが積極的に行われており、その増加率は PCI、EVT を遥かに凌ぐ勢いです。昨年の VIVA2019 に同時開催した VEINS2019 に私も Faculty として参加しましたが、参加者は 500 人を超え、熱心な議論が行われました。毎年参加者が増加しており、15 年前の VIVA の時と同様に心に突き刺さるものがありました。米国よりも先に複数の静脈ステントが承認されている欧州の LINC においても、動脈セッションは例年通りですが、数年前より静脈セッションは毎年拡大していることは、皆さんもご承知の通りです。

一方で日本においては静脈瘤に対する表在静脈治療は血管外科医を中心に普及していますが、深部静脈疾患に対してはほとんど治療が行われていない現状です。急性 DVT は肺塞栓合併例において循環器、放射線科医を中心に血栓溶解療法、IVC フィルター挿入が行われていますが、目的は肺塞栓の予防であり、慢性期に発症する PTS（血栓後遺症候群）には関心がなく、疾患の存在すらも知らない先生もたくさんいます。静脈ステント、血栓吸引デバイスなど欧米で使用されているデバイスが使用できないデバイスラグの存在がこの状況を生んでいると思いますが、それ以上に、多くの医師が静脈疾患に対する、知識、診断、治療について理解が足りないことが原因であると VEINS に参加して強く思いました。15 年前の日本と同じ状況です。

当院では 2016 年から静脈疾患を専門にしている血管外科医の星野祐二先生をお招きし、循環器センターの中に静脈専門チームを作成し、難治性静脈疾患治療に積極的に取り組んでまいりました。圧迫療法、表在静脈治療などの標準的治療で治らない PTS の患者さんを診させていただき、その中に我々が身につけたカテーテル治療の技術・経験が静脈ステント治療に役に立つことを実感しました。しかし、一方で昨年末に訪問した英国の血管外科医 Stephen A. Black 先生の手技を拝見すると、デバイスのみならず Strategy においても日本との大きな Gap を感じました。我々の技術を最大限に活かすためには、静脈疾患への知識を身につけ、標準治療を理解し、適正なインターベンションの適応を理解することが重要です。

今年の JET-VENOUS セッションは、米国の VEINS2019 の責任者で米国血管医学会の現理事長でもある Raghu Kolluri 先生、VEINS2019 の主要メンバーで米国カテーテル治療専門医と血管専門医の 2 つの資格を有する Mitchell Silver 先生の指導のもとに、国内においては静脈疾患に造詣の深い、血管外科の孟 真先生（横浜南共済病院）、小川智弘先生（福島第一病院）、星野祐二先生（福岡山王病院）、循環器内科の

安齋 均先生（太田記念病院）、山田典一先生（桑名市医療センター）と共にプログラムを作成しましたので、大変教育的な、実践的なものが出来上がったと思います。

2月21日(金)

1日目は静脈疾患の基礎、静脈瘤に対する表在静脈治療、PTS、NIVLに対する静脈ステント、急性DVT、肺塞栓、ICVフィルターについて座学を中心に学んでいただきます。海外からは日本の形成外科医でありながら、米国で血管専門医(Vascular Medicine)を取得し現在Stanford大学の創傷治療センターで活躍中の深谷絵里先生をお招きしており、静脈疾患に対する診断治療のみならず、米国の血管専門医の現状について詳しい話が聞けるとと思います。インターベンションについては米国より前述のSilver先生に加えて、同じ病院でたくさんの静脈インターベンションを経験しているMichael Jolly先生にも参加いただき、技術的なことをレクチャーいただきます。この他に世界で最も静脈ステントの経験のある血管外科医Black先生を英国よりお招きしており、興味深いお話が聞けるとと思います。また、本邦におけるデバイスラグを解消するためにTHMを通じて静脈ステントの導入について産官学で議論します。

2月22日(土)

2日目午前中は、福岡山王病院より初めて生ライブ中継を行います。PTSとNIVLの2症例に対する静脈ステント症例を提示します。PTS症例は本邦で使用可能なデバイスを用いて治療を行います。NIVL症例は動脈ステントのステント再狭窄症例で、欧米で承認されている静脈専用ステントを植え込む予定です。また、静脈インターベンションの適正な適応を決定するためには下肢静脈エコーは欠かせない診断手技です。そこで、下肢静脈エコーを学ぶために、星野先生の実技を生ライブでお見せしたいと思います。午後は日本、及び海外の先生が持ち寄ったビデオライブで症例検討を通じて静脈インターベンションの適応、手技について学びたいと思います。

盛りだくさんの企画ですが、日本における静脈疾患治療の夜明けになると思います。日本のEVTに来る、次の麒麟は静脈インターベンションと確信しています。少し、古いですが、“今でしょう”でまとめたいと思います。

大阪のJET2020静脈会場でお待ちしています。

皆さんと一緒に静脈疾患の患者さんの足を守りたいと思います。

Lets think !